

小麦の穂揃期における群落の体制と
収量との関係について

藤田究

系統適応性検定試験における 40 品種・系統の小麦および早熟化栽培施肥法試験における 15 種類の施肥法区の小麦(品種:セトコムギ)を供試し,穂揃期における小麦群落の体制と収量との関係について検討した。

1. 系統適応性検定試験においては,LAI がほぼ 5 までは LAI の大きい品種・系統ほど収量は高かったが,LAI5 以上では収量は頭打ちあるいは減収する品種・系統が多かった。また,直立葉をもつ品種・系統は,葉の下垂するものに比べて LAI が小さいわりに収量は高い傾向が認められた。
2. 早熟化栽培小麦の施肥法試験においては,施肥量が多いほど収量も高くなったが,LAI5 を超えると収量は頭打ちとなった。そして基肥・追肥分施肥区における収量は,同一施肥量の全量基肥区に比べて収量は高くなった。また,穂揃期における植物体中の窒素含有率が高いほど,収量は高くなる傾向が認められた。
3. 以上の結果から,小麦の収量を向上させるにはまず適正な LAI を確保し,そして受光態勢の良好な草型とし,さらに追肥によって葉の光合成効率を高めることが重要であると示唆された。